

# 愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579

E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321

編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

95号

戦後70年を迎えた2015年も残りあと僅かとなりました。平和や民主主義を脅かす動きがますます加速していった2015年であったように思います。巻き返しをはかるために、今、私たちが考えるべきことについて、特集を組みました。是非、ご一読くださり、平和が実現される年が迎えられるよう行動していきましょう！（平田義）

**「おこなわれたいっさいの不当なことにたいして、  
それをおかしたものに罪があるばかりでなく、それをとめなかったものにも罪がある」**

…エーリッヒ・ケストナー「飛ぶ教室」より

” 中間貯蔵地候補に京都反発 関電、福井県外に計画

【京都新聞 2015年11月20日】

関西電力は20日、貯蔵の限界が近づいている原発の使用済み核燃料の対策として、「福井県外」に2千トン規模の「中間貯蔵施設」を新設する計画を公表した。2020年ごろまでに場所を確定させ、30年ごろに操業を始める。関電が示す立地条件に京都が合致し、自治体は強く反発している。

(中略)

山田知事は20日、関電の計画表明を受けて「関電は拒否を打ち出している京都府や自治体の姿勢を十分考慮してほしい。われわれの方へ持ってこられても困る。関電から(立地に関する)説明があれば『その気はない』と伝えなければならない」と述べ、警戒感を示した。”

先日新聞を読みながら目を留めたのは、地元京都に関わる話題だから関心を寄せたのだろう。一方で、普段の生活の中において自分の身近ではないもの、自分自身との関わりが少ないものに対しては、中々関心を持ってない事の方が多い。

ここ一年でようやく全国的に取り扱われるようになってきた、沖縄における米軍基地問題についても同じ事が言えないだろうか。

沖縄の基地問題に関して、沖縄では「日本全体の」問題として捉えているのに対して、本土では「沖縄の」問題と捉えているという。意識的、無意識的な無関心が今の沖縄の状況を生み出してきたのだと言えないだろうか。

沖縄普天間基地の閉鎖に伴う名護市辺野古沖への埋立移設に関して、翁長沖縄県知事は法的な瑕疵があったとして前知事の埋立承認を取り消し。国は瑕疵は無いとして知事の承認取り消しの効力を停止、県は係争処理委に審査を申し出ている。

また同時に国は知事に代わって取り消しを撤回すべく代執行の手続きを開始、これに従わない県を提訴し法廷での争いに突入している。

埋立承認取り消しにさきだつて、9月にスイスで行われた国連人権理事会でのスピーチから帰国した翁長知事は会見の中で、”日本の安全保障のためなら、十和田湖や松島湾、琵琶湖を埋め立てるのか。自分たちのところでできない人たちが、沖縄の美しい海を埋め立てるということ自体、日本の民主主義がおかしなものになっているのではないか”と述べた。

最初に聞いた時は正直に言って突拍子も無い例えだと思ってしまった私は、恥ずかしながらやはり自分に関わりのないものと捉えてしまっている証左であろう。

安易に一括りに出来ないことも重々承知の上で、かなり乱暴な例えで考えてみる。0.6%の国土面積に74%の米軍基地が集中している沖縄の基地問題と全国に50数基存在している原発問題を仮に置き換えて考えてみた場合。沖縄に74% (40基弱) の原発が集中している状況があった時、私たちは日本全体の問題として捉えられるだろうか。(現実には既にXバンドレーダーの設置が進められていたりするが、) 立地条件下に合致する京都府下に米軍基地施設を新設する計画に対して「自治体の姿勢を考慮してほしい。われわれの方へ持ってこられても困る。」と府知事は言うだろうか。

先日行われた代執行訴訟第一回口頭弁論で翁長知事は最後にこう述べた。

”日本には、本当に地方自治や民主主義は存在するのでしょうか。沖縄県にのみ負担を強いる今の日米安保体制は正常といえるのでしょうか。国民の皆さますべてに問いかけたいと思います。”

一地方と国だけの問題とはたり得ない。私たちの見識が問われている。(安野友喜)

## 「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」

(マタイによる福音書7章12節)

朴実さん講演会、生野での研修に参加して

出口剛史

子どもが遊んでいる日常のひとつコマ。「もー! ちゃんとおなまえよんで!」。意にそぐわない呼び方に対して、娘は怒りをあらわにした。4歳の子どものさえ無意識に、あるいは本能的に自分自身の存在を名前に重ねている。

漢字の読み方や珍しい響きで名前に苦労した経験はあるだろうか。私は「出口・入口・非常口♪」とからかわれ、親に恨みを向けたことは幼心に覚えている。

この秋、私の経験とは次元の違う、名前にまつわる問題に向き合う機会に恵まれた。

9月16日、法人の京都ブロック研修で、京都市南区の東九条で生まれ育った朴実(パク・シル)さんのお話をうかがった。朴さんは在日朝鮮人として受けた差別や歪んだ社会の仕組みに立ち向かい、東九条マダンの実行委員長としても活躍された。マダンとは「広場」の意味。在日朝鮮人が多く暮らす東九条で毎年開催されるまつりで、民族交流や自己表現を目的としている。在日朝鮮人は日本の植民地支配の結果として、日本に居住することになった、朝鮮半島にルーツのある方とその子孫のことを指す。

朴さんは日本名(日本人)でないというだけで就職は門前払いされ、結婚を反対された。生きるためにやむなく日本国籍を取得する際、日本人に近い名前を名乗るように強制された。名前は「自分は何者か」を定義するシンボルでもある。それが、日本人とは違うという理由で理不尽な扱いが許されているのか。怒りや屈辱に耐えてきた記憶の暴走を抑えるかのように、マイクを持つ朴さんの手は時折震えていた。

いたずらに怒りを撒き散らしたわけではない。朴さんの言葉を、自分の行動に置き換える。多数派や常識を疑わず、無条件に受け入れないこと。おかしいことは「おかしい」と表明できる言葉を育むこと。違いにひるむ自分を、正直に認めること。

また、10月15日～17日は法人のリーダーシップ養成研修に参加した。場所は人口の3割前後が在日朝鮮人を占めるという大阪の生野区。高齢等の理由で介護が必要になった在日朝鮮人が通うデイサービスにお邪魔する機会もあった。80代～90代の方が20名ほど利用されており、とにかく皆さん肌が艶やかで、笑顔がはじけていた。元気の源について、デイサービスの代表者は「言葉も食事も名前もありのままにいられるから。誰にも批判されない場所だから」とおっしゃっていた。それを「心からの解放」と表現されていたことが印象に残っている。

名前・属性・文化・価値観の違いは、時として排除・差別の標的にすり替えられる。それをけしかける風潮もある中、ありのままにいられない状況を諦めるしかなかった歴史がある。今なお、本名ではなく通名での生活を余儀なくされる方もおられる。ちなみに、デイサービスでは本名で呼び合っているが、「今さら本名を出さないでくれ」というご家族からの苦情も過去にはあったらしい。

名前は人にとって最も身近で、かけがえないパートナーでもあり、自分そのものでもある。名前をないがしろにする行為は、人の尊厳を踏みしめるにも等しい。あの日出会った笑顔には、誰もが「心から解放」される社会への希望が溢れていた。同時に私たちへの期待も込められている。

娘は怒りに任せて切り返した。「おとうさんも○○ってよばれたら、いややる?」。

マタイによる福音書7:12でイエスの言葉が記されている。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」。

「してほしくないこと」はしない。「してほしいこと」をする。今、私たちが実践すべきことは、知恵と想像力を駆使したシンプルな原則。4歳児に諭されてしまったダメ親父は、名誉挽回のため、背中で示さなければ。

### 2015年7.8.9.10.11月の行事報告

7/5.16.26 喀痰吸引第3号研修

7/30 『遊隣』海企画

8/05-06 『遊隣』キャンプ

8/10-11 『遊隣』キャンプ

8/20 『遊隣』クッキング企画

9/07-11 BBQ Week

9/16 法人京都ブロック学習会(朴実さんお話)

10/8-9 デイ・シサムー泊旅行 in 天橋立&城崎

11/4-5 デイ・シサムー泊旅行 in 天橋立&城崎

10/25 向島秋の祭典

## 「ゆっくり心に沁み込むような 誰もが納得できる形で平和を広めたい」

クリスティーナ紀子さんインタビュー

**Q：SEALDsで活動するようになったきっかけは？**

始めは数人のグループで、中立という立場を大切に、学生を集めて話をしたり、選挙を流行らせる方法をとったりという行動をしていました。しかし、メンバーの一人から、中立であり続けることの限界や平和は祈るだけで守れない、行動しないと壊れやすいので「反対」という声をあげようという提案があり、SEALDs（シールズ：Students Emergency Action for Liberal Democracy - s）のメンバーとして行動することにしたのが始まりです。

**Q：平和、戦争反対と思うようになったのは？**

一つは、貧困や差別から、アメリカ軍に入隊せざるを得ない若者の存在を知ったからです。また、虐待を受けた経験のある人は、ない人より、自分の生命を大切に思えない現状があり、危険を伴う仕事にも高収入だからと気軽に応募してしまう場合があることも知りました。

もし、日本で、戦争で人を集めなければいけない状況になった時、最初に犠牲になるのは、自分を大切にできなくなった人たちや社会の中で弱い立場の人たちなのではと思うようになり、そのようなことがあってはならないと強く感じたことです。

もう一つは、自分自身の生きづらさを問答する中、ルーツを探ると、そこに「戦争」があったというのも要因です。

**Q：SEALDs活動に入って感じたことは**

子どもが、「あの時戦争反対って言ってくれてありがとう」と話すような平和な未来に向かって、ひたむきに運動している一人ひとりを本当に尊敬しているし、これからもずっと大切な仲間でいたいと感じています。ただ、デモでのコールの内容が相手を責めるものであったり、行進が車いすでは追いつけないスピードであったりなど、運動のスタイルはまだ改善が必要だと思っています。自分の権利主張、抑圧するものには敏感で、自分たちが踏みつけている物には無頓着とならないよう常に意識したいです。

今はバーンアウトしてしまって、なかなか次の行動に歩み出せずにいるのですが、またSEALDsを再開した際は、ロンドンの絵文字デモ

のように誰もが参加しやすいデモ\*の在り方を提案してみるのもいいなと思っています。

\*[http://greenz.jp/2015/06/23/london\\_earthmojis/](http://greenz.jp/2015/06/23/london_earthmojis/)

**Q：これからどのような形で行動されますか**

書くことが好きなので、フェイスブックや新聞の投稿など、自分がじっくり考えたものを読んでいただく機会を増やしたいです。また、文章だけではなく、詩や写真、絵など色んな方法を使って、思いを表現していきたいと思っています。そして、友だちと政治の話を普通にできるようなきっかけを作りたいです。

**Q：どのような世の中を求めますか**

運動しているからいいということで留まらず、理想は自分自身がベースとしている、ユネスコ憲章/The Constitution of UNESCO前文「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」を実践していきたいです。

軍の基地があることのメリットより、そこから飛び立つものが誰かを傷つけているのだということを知り、日本に住む人だけではなく、誰もが傷つけられることのない世の中になることを望みます。

「自分に関わる人の命が脅かされる時には主張するが、他国の人の人権には無関心」となりがちであることを肝に銘じ、いついかなる時も思いを馳せられる自分でありたいです。

本来の平和行動デモは敵を作るためではなく、味方を増やすためにあるのだと思います。しかしながら、デモのコールでは相手を否定し敵対するような言葉が多いのも現実です。“安保関連法に反対するママの会”の「だれの子どももころさせない」というコールのように味方を増やす呼びかけが大切だと思っています。

沖縄平和運動の父、阿波根昌鴻さんの反戦と非暴力の歩みを学び、じわじわゆっくりと心に沁み込むような活動を広げたいと思っています。

**最後に、メッセージを…**

来年の参院選に向けて、皆さんと一緒にアイデアを編み合わせ、できることを精一杯していきたいです。

(聴き取り：平田義、辻早苗)

メッセージ

Kさんへ  
 今秋、61歳で天国へ旅立たれたKさん。がん末期の宣告を受けてから約8ヶ月、最期までKさんらしく頑張られましたね。  
 出会いは10年程前、脳出血を患われた後でした。失語がきついため思いを伝えにくいもどかしさもあり、最初はよく怒られましたね。でも関わりが深まるうちに意思疎通が図れるようになり、怒られる回数も減っていきました(笑)。  
 転機は、約2年後の市営バリアフリー住宅に引っ越してからでした。おひとりで自由に外出できる環境になり、表情がイキイキとされ、言葉も笑顔もどんどん増えていきました。  
 忘年会などでビールをおいしそうに飲む姿、真夏の炎天下の中でも送迎を拒み、2日前まで体を斜めに傾けながらも必死に車いすを自走してきた姿…思い出すとまた涙があふれてきましたよ。Kさん、たくさんのお話を教えて頂きありがとうございました。愛隣館のみんなを天国からずっと見守っててくださいね。 佐藤雅裕

Yさんへ  
 どんな方にも、「しっかりしいやあ〜」と、満面の笑みと元気な声で挨拶してくれたYさん。  
 お出掛けすることもお酒を飲むことも大好きでした。旅行へ出かけたときも、お酒を本当に嬉しそうに飲んでいたり、通りがかりの知らない人へ笑顔で挨拶をしたり、そんな姿がとても素敵でした。  
 利用者やスタッフの誰にでも、やさしく接してくれ、受け入れてくれるYさん。天国でも、大好きなお酒と人との交流を楽しまれていることでしょう。  
 でも、残されたご家族、スタッフは寂しくなりました。行事の度に、あの時Yさんはこうだったなあ、ああだったなあ、思い出話をする事も沢山ありました。いつまでもYさんのこと忘れません。というか、忘れられません。  
 では、また会う日まで。 井桁光

「彼は世界にとけこんだ」

長い入院生活で外の空気に触れることが好きだった。それは暑い夏の日でも雨の日でも黙々と変わらなかった。その様子はお百度参りのようだった。初めて会って言葉を交わしたのもグラウンドを周回する彼の横を歩きながらだった。

彼は、理屈っぽく、馬鹿正直で、めんどくさい、でも「人」が本当に好きだった。先日テレビ番組で93歳になる瀬戸内寂聴さんを見た。それまで「自分はこれだけ長く生きてからもういつ死んでもいいんだ」というようなことを語られていた。しかし、いざ癌が見つかって闘病生活をしておられた時のことだ。「一度も死にたいと思わなかったし、この病気で死ぬかもしれないと思ったことさえ露ほどもなかったことに気づいている」と。

誰もがその瞬間まで、実は本当は「生きたい」と思っていると思う。ただ、その内なる声にすら気づくことができなくなる時があるのではないか。

彼はどうしてなんだろう。納得できない。わからない。来週にあったバーベキューは一緒に行く約束をしていた映画村は・・・楽しみにしていた城崎の泊旅行は・・・

ある脳科学者が脳卒中に襲われ、リハビリを経て、新たに自分と世界との深い繋がりを感じる気づきを得られたことを語る言葉に出会った。

『雨の中を歩くと、いろいろな拮りをもった体験ができる。顔に降りかかる水滴は、わたしを美と無垢の世界へといざないます。そして深い清めの感覚に包まれたように感じます。顔の上に陽光の暖かさを感じたり、頬にそよ風のくちづけを感じると、あらゆる存在と一つだと感じる自分自身の一部につながるのが、よくわかる』

ちょうどその日も雨だった。彼は一人で世界にとけこんでいった。直接彼を見ることや彼と話すことができなくなった。でも、世界にとけこんだ彼はいつも僕らを感じているに違いない。僕らも目を閉じて眼差しを世界に向け、耳を世界に傾ければ、きっといつも彼の感じていた、今彼のいる世界とつながれるはずだ。

今でも彼の何とも言えない、ちょっとにやけた顔と、甘えたような「またかいな」というあの声が聞こえてくる。 太田正人

2015年 クリスマス献金のお願い

皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けられますこと、心より感謝します。今年度もクリスマス献金にご協力頂きますよう、お願いを申し上げます。

《クリスマス献金・要項》

目的：障がい児・者とその家族とが地域で安心して暮らすことができる為に愛隣館研修センターの今後の活動を支援する

目標金額：3,000,000円

郵便振替：01020-5-39321

口座名：社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

★お知らせ★

▽愛隣館研修センターは、12/29-1/3まで休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▼95号のご意見ご感想お聴かせ下さい。(さ)

▼2015年は酷い年だった▽国民の大多数が反対していた、「戦争法案」が強行可決された▽福島県の傷も癒えていないどころか今なお塗炭の苦しみに苛まれている人々がいるにもかかわらず、原発が再稼働された▽辺野古では新基地建設を沖縄の声を無視し強硬に推し進めている▽今こそ立ち上がり声を挙げつづけなければ！(ひ)